

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	中村 文紀
主 論 文 題 名 :				
The Development of the Copulative Perception Verb Construction in English: A Corpus-based Approach (英語における連結詞的知覚動詞構文の発達：コーパスに基づく調査)				
(内容の要旨)				
<p>本博士論文は、英語に存在する連結詞的知覚動詞構文 (Copulative Perception Verb Construction、以下 CPVC) の近代英語における発達を電子コーパスを用いて調査、記述、説明しようと試みるものである。連結詞的知覚動詞構文とは、その中で知覚動詞が連結詞の be 動詞のように振る舞う構文であり、(i)主語が知覚者ではなく知覚対象である、(ii)活動動詞として通常用いられる動詞が状態動詞として用いられている、(iii)補語の生起が義務的であるなど特異な性質を持つことから言語学の様々な分野で研究が盛んに行われてきた。具体的な例は以下のようなものが挙げられる。</p> <p>(1) a. Mary looks happy. b. The plan sounds reasonable. c. The flower smells sweet. d. The cake tastes sweet. e. The cloth feels soft.</p> <p>またこの構文は、形容詞から as if 節まで様々な補語をとることが知られている。しかし、この構文は未だ変化を続けており、先行研究でも詳細に扱われてこなかった用法が創発していることがコーパスを用いた本研究での調査から明らかとなった。事例研究で取り扱った構文の例を以下に示す。</p> <p>(2) a. <u>It looked like</u> I'd just dropped from heaven when he first saw me. (COHA, 1913, FIC, TTembarom) b. The only job prospect that this guy had, <u>it looks like</u>, is this hedge fund, this joke hedge fund he was starting up based out of his own apartment. (COCA, 2015, SPOK, CNN: Nancy Grace) c. <u>It looks to me that</u> Nathan Bedford Forrest was a military genius. (COCA, 2011, SPOK, CNN_Cooper)</p>				

(2a)は、従来 as if と like は機能の面から同じであるという記述がなされてきたが、本研究で異なる分布をしていることが明らかとなった。(2b) は、評言節 Comment Clause として副詞的に用いられている例である。(2c)は、従来非容認的であるとされてきた知覚動詞+that 節補語の例である。本論文では、これらの新しく発達した構文をコーパスを用いて詳細に記述・説明することでこの構文、あるいは知覚のより包括的な理解を行う。以降本論文を構成する 8 章の概略を述べる。

第 1 章では、上記の本論文の目的を提示し、本論文で扱う CPVC が類型論的に知覚動詞のどこに位置しているのかを述べる。

第 2 章では、CPVC の共時的な記述を行い、この構文が単一的な構文カテゴリーに留まらず家族的類似性に基づくネットワーク構造を示すことを明らかにする。その上で、そのネットワークの発達が通時的な経路を辿った結果であり、今でも新しい変化が生じていることを示す。

第 3 章では、CPVC を扱った先行研究を批判的に検討する。前半は、構文を構成する主語、動詞、補語の観点から先行研究をまとめる。後半では、CPVC の通時的な分析の代表例として、Taniguchi (1997), Gisborne and Holmes (2007), Whitt (2010)を取り上げる。従来の研究では、構文の成立や意味変化に焦点が当たっており、扱っている時代も比較的古い時代であることを指摘する。しかし、言語が常に変化することを考慮すると、さらなる記述が必要であることを明らかにする。

第 4 章では、本論文で用いる理論的・方法論的枠組みを説明する。本論文は基本的には文法化とその他言語変化に用いる理論を使用している。また、類推による変化と(間)主観化という 2 つの意味変化に関する議論が後半の事例研究では多く用いられている。

第 5 章では、連結詞的知覚同土構文 (以下 CPVC)が定形詞節を補語としてとるようになった発達において、関与した要因を考察する。先行研究では、新しい補語パターンを獲得する場合、seem, appear の補語パターンを類推によって得られたことが指摘されている。これは、look などの知覚動詞が seem と同じくモダリティ的な意味を獲得したことが引き金になっている。しかし、実際に seem の影響で CPVC の補語パターンに影響を与えたかどうかを、実際のデータを用いて調べた研究はない。このギャップを埋めるため、アメリカ英語 1800 年から 2000 年代までカバーしている Corpus of Historical American English (Davies, 2008-)を用いて、この仮説を検証した。CPVC が取り得る補文標識は、as if, as though, like であるため、それぞれを検索して調査を行った。検証した結果、補文標識によって発達経路が異なることが明らかとなった。as if (though) の場合には、seem が look に先行しており、その後頻度が逆転している。これは、仮説通り seem の影響を受けて CPVC が補文を取れるようになったことが示唆している。

as if の場合の発達は以下の通りである。

1. seem as if がまず最初に存在する。
2. look の意味が変化して、より汎化された推論を意味するようになった結果意味的に類似する。これ自体は知覚→証拠性→認識様態という普遍的な意味変化に乗っている。
3. 意味的な類似性に基づいて類推が起こり look が類似の機能を獲得する
4. 意味的・形式的に類似した結果競合が起こり、look as if が seem as if に置き換わりつつある。発達の手順はレジスタごとに異なる。

しかし、like の場合には、必ずしもこの仮説は支持されない。その理由は以下の通りである。

1. seem like はかならずしも look like に比べて時代に先行しない。
2. 常にもっとも頻度の高い組み合わせは、すべての時代区分において look like である。

ここから like の発達は、as if とは関連しつつも別の経路であることが示唆される。like はもともと前置詞句であり、名詞をとっていた。like は、補文標識としての機能も獲得し、それが look like の使用にも影響した。

1. look like + 名詞句と look 形容詞 like があった。
2. like が補文標識としての機能を獲得し、look like 文を獲得する
3. look like 文と look as if 文の形式的・意味的類似性によって as if と like の類似性が確立する。また前述の look と seem の形式的・意味的類似性がさらに進行する。
4. その結果 seem as if を seem like へと拡張する。

この2つの as if と like が形式的・意味的に類似した結果、競合関係が起こった。この段階では、{look, sound, seem, appear} という新しい動詞カテゴリが発見しつつある。この中では as if と like が競合しており、アメリカ英語では、like が競合している。

1. [V] as if と [V] like が競合している。
2. 補文標識の観点からは、like が as if に置き換わりつつある。

この調査の貢献は3つである。1つは、記述的貢献である。本稿での調査の結果、補文標識ごとに発達経路が異なることが明らかとなり、先行研究でいわれているよりも類推に基づく発達経路が複雑であることが明らかとなった。2つ目の貢献は、言語の発達が漸次的に起こっていることが明らかとなった。as ifが取れるならば、同様にlikeも取れるというのではなく、特定の文脈における定着が先立つ。また、どの補文標識を先行するのかということについては、動詞ごとのばらつきが大きいことが明らかとなった。3つ目は、カテゴリーの創発についてさらなるデータを提示した。もともと認識様態動詞であるseemとappearともともと知覚動詞であるlookとsoundという異なる起源を持つ動詞群が、異なる経路に基づいて、共通した形式と機能を持つに至る過程を記している。全体を通すと言語の漸次的発達を記す使用依拠モデル Usage-based Model と一貫性のある議論になっている。

第6章では、CPVCが評言節 Comment Clause として使われる用法を COCA と COHA から例を収集して分析を行った。CPVCの通時的な側面を扱った先行研究は、主に単文としての用法に焦点が当てられており、特にその構文としての成り立ちや証拠性や主観性を得る過程が分析されてきた。しかし、評言節としての用法は、主節としてのlook/sound likeが従属節から統語的・意味的に切り離されることで副詞節化する現象であり、文としての用法の後に生じており分析した研究は少ないため分析の余地がある。本章ではまず評言節としての用法が確立する要因について4つの要因を挙げた。まず、付加疑問文は通常主節と一致するが、CPVCの場合には従属節内と一致することが多い。これは統語・意味的に主節とその他の部分が切り離される一因となる。2つ目に、CPVCの主語は時代が下るにつれ省略や形式主語itの割合が増えていく。このことは主節と従属節の間の統語的・意味的な関係が無くなり、主節の形式が(it) looks/sounds likeと固定化されることでより副詞節として独立しやすくなる。3つめに、形式が固定化された後、副詞の特性である生起位置の自由化が起こったことを示した。具体的には、文中や文末に生起することが多くなったことを示した。4つめに、従属節が主節としての役割を持つようになると、もともと仮定法で仮想的な類比を表していたものが、直接法で発話内容としての表されるようになることを示した。これら4つの証拠から評言節が発達したことを示した。さらに、副詞化すると、もともと主節と従属節という関係から、文にのみ修飾していたCPVCの評言節が、前置詞句や名詞句などより幅広い要素と共起することが明らかとなった。この評言節は、主節であったときの証拠性・主観性を継承し、修飾対象に話者の証拠に基づく主観的な判断を付与して、断言しないよう発話を和らげる効果があることを示した。

第7章では、もっとも新しい補語パターンである *it looks/sounds that* を考察した。この構文パターンは、未だ多くの母語話者にとって容認可能ではない。このため作成基盤の研究では、扱われていない。しかし、コーパスで実例を探すと、実例が見つかる。これまで、共時的な考察は行われている。しかし、どのようにこの構文が発達してきたのかという問いについては研究がなされていない。この問いについて、*BYU-Corpora* の各種コーパスを用いて通時的な発達を調査し、それを文法化・構文化の理論によって説明することを試みた。

その結果、*it looks that/it sounds that* は先行研究で言われてきたよりも古い時代から散発的に使われてきたことが明らかとなった。また *it looks that* は容認性はあまり高くないが、*looks to me that* や *looks (副詞) that* のように表層形で *look* と *that* が近接しない例の割合が高いことが明らかとなった。これは、*look that* は *look like* と直接的に対照されるために容認されにくいのだと考えられる。また、口語レジスタにおいて実例が見受けられる。これは、書きことばでは、発話した文をもう一度視覚的に確認できるために違和感を覚えてしまうのに対して、口語ではもう一度確認できず、実時間上で相手がいる会話の中で問題にしにくいから創造的な使用が認められていることが示唆される。

また、少数ではあるが談話標識としての実例も見受けられた。しかし前章で述べてきた *look like* とは発達経路が異なることが示唆される。*like* は省略不可能である一方、*that* は省略されることで主節と従属節が統語的に切り離される可能性がある。これについては *Thompson and Mulac (2001)* の仮説に従っていると考えられる。

第8章では、結論を述べた。まず本稿で何を明らかにしたのか結果の総括を行う。その後、その結果によって本論文がどのように言語学に貢献するのかを述べる。また本論の限界を述べ、将来への展望を紹介して論を閉じる。事例研究で扱ってきた構文と同様に *seem* から影響を受けたであろう *look to V* 構文を扱うことは必要であるが、本論では扱っていない。また、本論では動詞は *look* と *sound* に限定したが、実際には思考動詞として機能するものとして *feel* が挙げられる。この動詞を分析することで言語と知覚の関係をより深く理解できることが期待される。

from corpora that it is actually used but in limited contexts.

All of the case studies suggest that there the CPVC (e.g., with look and sound) has been integrating with verbs of seeming (e.g., seem and appear) into a new modal verbal category. The CPVC have acquired complement patterns such as as if and that clauses via analogical extension from verbs of seeming. On the other hand, verbs of seeming got like complements.